

# 奴隸反乱の宗教的・民族的側面(二)

——J・フォークトの奴隸反乱研究を中心として——

## 一、序

山 本 晴 樹

## 二、奴隸反乱の経過(以上前号)

## 三、奴隸反乱の宗教的・民族的側面

## 四、結

## 三、 奴隸反乱の宗教的・民族的側面

Ⅲではフォークト論文の主眼である奴隸反乱の宗教的・民族的モチーフが考察される。

奴隸は政治的世界から完全に排除されていたので、宗教の中に人間としての最後の拠り所を見出していた。たとえば一時的にもせよクロノス祭やサトゥルヌス祭では社会的差別は忘れられ、主人も奴隸もなく皆平等に扱われた。<sup>②⑥</sup>また神殿の聖域は奴隸にとって、アジール(Asyl)として存在していた。<sup>②⑦</sup>奴隸とのつながりのある神

々には、地下神 (Erdgottheiten) の外、ラレース、アルテミス、ディアナ、ゼウス・エレウテリオス、ユピテル・リベル、ヘリオス、更にオリエントの太陽神で西方に伝えられたハダッド、その妻アタルガートイスなどがあつた。奴隸はこれらの神々の祭祀に参加を許された。従つて宗教は奴隸にとつてある意味での自由の場であつた。彼らは宗教的に熱烈になることによつて神の救済にあずかろうとし、また来るべき未来がいかなるものかを探ろうとした。このような雰囲気の中に小アジア、ギリシア、シキリア、イタリアの奴隸たちはいたと言つてよい。彼らは解放の可能性がわずかでも与えられると、一抛に公けの鬭争に踏み切つた。その際奴隸の中の予言者はきわめて大きな役割を果たした。第一次シキリア反乱のエウヌス、第二次シキリア反乱のサルウィウス、アテニオン、そしてスパルタクス反乱のスパルタクスの妻がそうである。

シキリア反乱においては宗教的モチーフがきわめて顕著である。その際まずシキリアの土地の神々が重要な役割を果たした。

カタナ (Catana) 近くにあるパリーキー (Palici) の神殿には、自由を求めた奴隸たちが結集し、第二次シキリア反乱を引起こした。彼らは誓約を監視する神でもあるパリーキーの前で、誓約共同体を結成した。そして最初の勝利が得られると、反乱指導者サルウィウスはこの神に紫衣 ( toga praetexta ある ) は toga laticlavaria ) を奉納した。

アエトナ (Aetna) にあるゼウスの神殿には第一次反乱のとき奴隸が結集した。この神に対しては、ローマもシビュッラエ (Sibyllae) の託宣によりこの地に使節を送り、奴隸と神との結びつきを絶ち切ろうとした。

シキリアで最も篤く崇拜されているエンナ (Enna) のデーメーター (ケレース) の神殿を、第一次シキリア

ア反乱の奴隸たちはあえて攻撃はしなかったようである。ローマもまたこの女神には使節を送り、ローマ内部の不穏な状況をなだめようとした。<sup>36</sup> この女神の祭祀に参加できるのは女性のみであったが、ただサルウィウスは祭祀のときの器楽奏者として参加を許されていた。<sup>37</sup>

シキリアの土地の神々よりはるかに強い影響を及ぼしたのは、シリアの女神アタルゲーティス (Ataragatis) である。この女神の信仰は故郷シリアからデロス島を介して、シリア出身の奴隸によりシキリアに伝えられた。従ってこの信仰は民族的要因を含み、またきわめて熱烈なもので、この女神の予言者エウヌスによって指導された第一次シキリア反乱は、それ故ほとんど宗教戦争の形をとった。この反乱におけるエウヌスの権力は絶大であり、あのマカバイオスの反乱でヨアンネス・ヒュルカーヌス (Ioannes Hircanus) が持った三権力、すなわち支配・司祭・予言の各権力をエウヌスもまた持った。<sup>38</sup> 従って第一次シキリア反乱はマカバイオスの反乱と同様、強大な世界帝国からの自由を獲得することによって、宗教的共同体から民族的共同体へ自己を転換させようとするものだった。その点でこの反乱には宗教的・民族的モティーフが絡み合っていたと言える。

シキリア反乱と比較しうる宗教的・民族的モティーフを有しているのはアリストニコスの反乱である。この反乱で彼が支持者である貧民と奴隸をヘリオポリテース (Heliopolites) と呼び、その国家をヘリオポリス (Heliopolis) と呼んだことは広く知られている。<sup>39</sup> ヘリオポリスはヤムブロス (Jambulos) の理想国家を<sup>40</sup> 模範にしているとか、西方でゼウス・ヘリオポリターヌスと呼ばれているハダッド (Hadad) を主神とするシリアの都市を示唆しているとか言われるが、いずれも確証がたい。アリストニコスはヘリオポリスにおいて正義の神であり被抑圧者の保護者であるヘリオス (Helios) の名において、一つの共同体を支配しようとし

た。つまり彼は自らをヘリオスとして、真の正義を実現しようとした。従って、ヘリオポリテースたることは彼の支持者にとって最高の市民権を得ることを意味した。このヘリオポリスには小アジアの多くの民族が参加したと思われるが、反乱が一時的であったが故に明確にしえない。

スパルタクス反乱における民族的要因はまさしく運命的な意味をもった。ヘレニズム期の各民族の軍隊の装備と戦術はそれぞれ異っており、この民族性はその民族がローマの支配下には入ったのちも維持された。このことはグラディアトル (gladiator) 制にも反映されている。グラディアトルは戦争捕虜から供給されたからである。グラディアトルは出身民族に応じた武装をし、他民族出身のグラディアトルと戦闘試合を行った。彼らもし集団を形成するならば、それは民族的集団にならざるをえなかった。グラディアトルの中における主な民族としてはサムニウム人、ガリア人、トラキア人があり、このうちガリア人とトラキア人は、スパルタクス軍において主力をなした。スパルタクス軍内におけるケルト・ゲルマンの集団とトラキアの集団は互に対抗し、軍内部に緊張を生じさせ、前者はローマ進軍を後者は故郷帰還を旨とした。<sup>(4)</sup> この分裂は結局スパルタクスによっても克服されず、反乱を敗北へと導いた。しかしながら、奴隸をその故郷に帰還させるといふスパルタクスの企ては、古代史において高く評価されるべきものである。

フォークトはこのように各奴隸反乱において宗教的・民族的要因がきわめて重要な役割を果たしたことを指摘した上で、最後に V で奴隸反乱について総括する。

エウヌスからスパルタクスまでの奴隸反乱にはモティーフの豊かさ、目的の多様さがみられるが、この反乱を一部の研究者は古代の社会主義あるいは共産主義の運動としてとらえた。そして彼らは反乱が時期的に集中して

いること、また各地で勃発していることから、それを国際的に組織されたプロレタリア運動として再評価しようとした。<sup>④②</sup>

第一次シキリア反乱の直後、ローマ、アッティカラのラウレイオン鉱山、デロス島それにミントウルナエ、シヌエッサでも反乱が勃発した。<sup>④③</sup> アリストニコスの反乱はブロッシウス (Blossius) の例の如く、<sup>④④</sup> イタリアの内乱と関連していた。第二次シキリア反乱では、ヌケリア、カプアでの反乱、またティトゥス・ウェッティウス (Titus Vettius) の反乱が先行し、ラウレイオン鉱山の反乱が後に続いた。<sup>④⑤</sup> スパルタクス反乱ではシキリアとのつながりが見られた。<sup>④⑥</sup> これらの事実は確かに奴隷の何らかの連帯を予想させる。

しかし当時地中海域では海賊が頻繁に出没し、それとともに彼らの交易とりわけ奴隷貿易を通して、奴隷にかわる情報は東西に伝達された。またこの時代の郵便制度は専ら奴隷に担われており、彼らは自己の業務を果たすかたわら、自己の身分にかかわる情報を各地に伝えることができた。更に祭、演劇、市場での人々の集まりは自然に情報の得られる場であり、そこからその情報は都市および農村の奴隷へと伝えられた。このような状況下であつてみれば、奴隷反乱の連鎖は必ずしも奴隷の意識的連帯を必要とせず、むしろ自然発生的なものであつた。従つて奴隷反乱は一つの目的をもつた組織的・統一的運動ではなかつた。即ち彼らの間からは制度としての奴隷制の廃止の声はあがらず、生産手段の所有の廃止よりもむしろ土地の配分が求められた。また獲得さるべき自由も往々にして支配者側から与えられる場合があつた。そして反乱が激化するにつれて、奴隷の中には裏切りが見られるようになった。自由人プロレタリアートはこの反乱に対して終始距離を保ち、奴隷との連帯を拒み続けた。彼ら自身が貧農と飢餓市民とに分裂しており、何らの統一体ではなかつたからである。「このような孤立の

中で奴隸に残された道は、主人を打倒してその土地を奪い、すべての世界が彼らに拒んだ自由を暴力で奪いとることであった。」(S. 58)

奴隸反乱の独自性という点で、反乱の政治的・社会的理念をみると、その多くが支配者のつくりあげたものからの模倣であって、彼ら独自のものではなかった。奴隸の宗教的信仰には独自性がみられると思われるが、しかしこれとても完全なものではなく、エウヌスやおそらくアリストニコスは、世界支配の要求の克服を試みたマカバイオスの反乱を模範にしたように思われる。最も独自性をもつものは奴隸の戦術である。彼らは支配者の側の正規軍に対して完備された軍隊を持ちえなかったが故に、彼ら独自の戦術を生みださざるをえなかった。ゲリラ戦術や心理戦術がそれである。しかしこれも永続的に有効ではなかった。というのも奴隸制を与えられたものとして受け入れていた奴隸、とりわけ都市の奴隸は、戦闘が長びくにつれて次第に、自由を求めて戦っている反乱奴隸を自己の味方ではなく、秩序をみだす賊としてみなすようになったからである。結局奴隸反乱には積極的な独自性は見出されなかった。

このような奴隸反乱に対して、支配者側は長い間真剣な対応を怠っていた。当時不服従、逃亡などの奴隸の日常的反抗、海賊などの非合法組織の跳梁が頻繁だったので、支配者側は奴隸反乱に対しても当初特別なものとは思わず、それを通常の手段、即ち密告、裏切りの奨励によって解決しようとした。しかし反乱の規模が拡大し、そのような通常の手段では対処できなくなったとき、初めて軍規の肅清が行われ、本格的な軍事力投入が始まった。辛うじて奴隸反乱が鎮圧された後、しかし支配者側がただちに反乱の教訓から善後策を講じたとは考えられない。というのもシキリアでは反乱後も長く奴隸の不穏な動きがあり、小アジアではアリストニコスの反乱後ミ

トリダテース (Mithridates) の反乱が生じ、イタリアではスパルタクス反乱のち今度はカティリーナ (Catilina) の陰謀が起きているからである。この状態は結局カエサルとアウグストゥスの時代における軍事独裁の登場によって終息することになる。

#### 四、 結

以上フォークトの奴隸反乱研究をみてきたわけであるが、その中で評価すべき点としてはまずその実証性があげられる。彼は奴隸反乱に関するほとんどすべての伝承史料・碑文に基づき、各反乱を詳細に検討した。その実証性は従来の研究と比較してはるかに精緻であり、また彼以後の研究と比較しても遜色がない。その点で彼の研究はきわめて完成度の高いものと言わなければならない。

次に評価さるべきは、彼が反乱を構造的に把握した点である。従来の研究は各反乱を時間的経過の中で把握する傾向が強かったが、彼は反乱を一つの時代的現象とみて、各反乱を個別的にはなく、構造的に把握しようとした。そうすることによって彼は奴隸反乱のもつ特殊性を浮き彫りにした。

その特殊性として強調されたのが反乱の宗教的・民族的側面である。この側面を提示した点もまた評価さるべきである。というのも本格的反乱研究の出発点となったソ連・東欧の古代史家においては、反乱の階級闘争としての側面は提示されても、宗教的・民族的側面は過少評価されたからである。フォークトによって反乱の宗教戦争および民族闘争としての側面は明らかにされた。

以上のような評価がフォークトの研究に対しては与えられるであろう。結局反乱自体に関するかぎり、その全

体像はほぼフォークトによって説明されたと言えよう。そうであってみれば、われわれに残された次の課題は、支配者側が反乱をどのように受けとめていたのか、ということである。これに関してはフォークトも既にみた如く、結論部分で概略的にしかふれてはいない。支配者側の奴隸反乱に対する対応という問題は、確かに史料上の制約もあってその説明は困難と思われる。しかしこの問題の解明抜きには奴隸反乱の歴史の意味は明らかにされえないであろう。今後の研究が待たれる分野である。

註

- ②⑥ M.P.Nilsson, REXI 1975f., HA 201ff.
- ②⑦ Diod. 11, 89, 7. Cf. F. Altheim, Römische Religionsgeschichte, I Baden-Baden 1951, S. 175ff.
- ②⑧ Diod. 34, 2, 5ff.
- ②⑨ Diod. 36, 4, 4.
- ③⑩ Diod. 36, 5, 1.
- ③⑪ Plut. Crassus 8, 4.
- ③⑫ Diod. 36, 3, 3.



- ③③ Diod. 36, 7, 1.
- ③④ Diod. 34, 10.
- ③⑤ Cic. Verr. II 4, 112.
- ③⑥ Cic. Verr. II 4, 108.
- ③⑦ Diod. 36, 4, 4.
- ③⑧ Joseph. B. J. I, 68f.
- ③⑨ Strab. 14, 1, 38.
- ④⑩ Diod. 2, 55—60.
- ④⑪ Plut. Crassus 9, 9.
- ④⑫ 井上茂 A. W. Mischulin, Spartacus, Abriss der Geschichte des grossen Sklavenaufstandes, hrsg. und eingeleitet von S. L. Utschenko, Berlin 1952.
- ④⑬ Diod. 34, 2, 19.
- ④⑭ Plut. Ti. Gracchus 20.
- ④⑮ Diod. 36, 2, 1ff.
- ④⑯ Cic. Verr. II 5 passim.
- ④⑰ これに関してわれわれはキケローの『ウエルレース演説』(Actio in Verrem)の史料的価値に注目すべきである。

Cf. W. Hoben, Terminologische Studien zu den Sklavenerhebungen der römischen Republik, Wiesbaden 1978.